

国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 E-mail: jifrs.kaiyodai@gmail.com

郵便振替番号：00100-6-26448 国際漁業学会

振込：ゆうちょ銀行 店番 019 当座 店名〇一九店 口座番号 0026448

2025 年度第 2 号

2026 年 2 月 24 日刊

目次

- | | |
|---------------------------------|------|
| 1. 新会長あいさつ | 宮田勉 |
| 2. 2025 年度 JIFRS 大会 (東京大会) 参加報告 | 湯浅俊介 |
| 3. 2026 年度 JIFRS 大会 (三重大会) 予告 | 松井隆宏 |
| 4. 事務局便り | 事務局 |

1. 新会長あいさつ

宮田 勉 (水産研究・教育機構)

このたび、理事の互選を経て、婁 小波 先生の後任として学会長を拝命いたしました。これまで当学会を力強く牽引してこられた婁 小波 先生に深く感謝申し上げます。また、長年にわたり理事・監事としてご尽力いただいた森下 丈二 先生にも心より御礼申し上げます。

私はこれまで副会長として学会運営に携わってまいりましたが、その経験を活かし、学会長としての責務を全うする所存です。理事ならびに会員の皆様には、引き続きご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

国際性と学際性を重視する学会として

国際漁業学会は、創設以来「国際性」と「学際性」を重んじて活動してまいりました。まずはその国際性の観点から一言を申し上げます。

世界の低所得国では、依然として乱獲や資源管理の課題が深刻です。地元の漁業者だけでなく、隣県の漁業者、隣国の漁業者が地元の資源を脅かしているということを各国の水産官僚から聞きます。時には遠方の国から来て、沖合の資源を乱獲している事例を聞くこともあります。レアケースですが、動力漁船が買えず、少し沖合の漁場は低・未利用になっている国もあるという話も聞きます。水産物流通では、漁船労働者がリアカーに大量の多種多様な魚を積み込んで、水揚げ場から売り場まで運び、そこに群がる買い手がリアカーを押し上げて魚を砂地にばら撒き、買い手がほしい魚を奪い合っている景色を目の当たりにしたことがあります。これらのような問題を見聞きすると、建築施設の支援が必要な場合もありますが、制度設計や地域協働の仕組みなどソフト面でも日本の事例や知識は現地でも十分役立ちます。そのような知見を持つ研究者が積極的に低所得国に出向き、調査、分析、現地報告、地域共同、社会実装する意義は大きいと思います

し、その活動は水産業の持続可能性に大きく貢献します。

海外で見られる低投資型の仕組みや地域コミュニティによる沿岸資源利用の事例は、日本の「海業」や地域振興にも示唆を与えます。例えば、マングローブを管理するために設けられた小道の横に小屋を設けて、マングローブの自然が観察できるとともに、その小屋に地場海産物の料理を届けてもらい、そこに棲む魚介類の味まで堪能できる仕組みがあります。また、水上に竹で建てられた元養殖施設の監視小屋を水上レストランにしたケースもあり、四方、床から涼しい風が入ってくる快適な空間を常夏の地で味わえるレストランになっており、時にはイルカなども見ることができます。これらのような場合、沿岸域を利用するので、地域コミュニティが共同して運営しており、日本で海業を考える際に良いアイデアを提供してくれると思っています。

持続可能な日本水産業への挑戦

日本の水産業は、漁獲量の減少、担い手不足、海洋環境の変化など深刻な課題に直面しています。このことから政府は矢継ぎ早に政策を打ち出しました。以下のとおり、近年、多種多様なチャレンジが行われており、漁業生産者、漁業系統団体、産地市場～小売業者、商社、外食産業、観光・レジャー産業、地域住民、地方自治体などステークホルダーが多岐に亘っております。ここに会員の活躍の場があると考えております。また、研究分野においても自然科学だけでは解決が難しく、社会科学との連携が求められています。つまり、学際的・超学際的なアプローチが必要になっております。

2018年の漁業法改正を契機に「水産政策改革」を進め、科学的根拠に基づく資源管理を強化しました。漁獲可能量（TAC）制度の対象魚種を拡大し、MSY（最大持続生産量）を基準とした管理の導入などです。さらにIQ（個別割当）制度や自主的資源管理協定を推進し、国際的な資源管理にも積極的に参画しています。

加えて、2022年に策定された「新水産基本計画」では、上述の資源管理の強化、水産業の成長産業化、漁村活性化を柱としています。対策として、水産業の成長産業化では、マーケットイン型養殖業、養殖業の高度化、生産性や収益性の向上、輸出促進、スマート水産技術導入などです。漁村活性化については、浜プランによる所得向上と人材確保、漁協の連携強化による市場機能の強化・集約、漁港再編や防災対応の整備、藻場・干潟の保全などです。さらに、観光や体験、加工販売を組み合わせた「海業」を推進し、地域資源を活用した交流人口の増加と雇用創出を目指しています。

研究面では、水産庁が「水産研究・技術開発戦略」を策定し、資源評価モデルや海洋モニタリングの高度化、気候変動対応技術の開発強化、完全養殖や閉鎖循環型陸上養殖の開発、ICT・AIを活用したスマート漁業・養殖、低魚粉飼料の開発など、気候変動対応、天然資源依存を減らす技術も重点課題となっています。さらに、加工・流通・消費技術の高度化、藻場・干潟の保全、地域資源活用による多面的機能の発揮、ゲノム研究や魚病対策などの研究も進められています。

学会の使命と強み

本学会の使命は、国内課題や現状を捉まえた研究成果や水産業実態を国内外関係者に発信・交流し、また海外のそれらの情報を国内関係者に発信・交流することが主な目的となっております。そのため、会員は国内をフィールドはもちろん、海外調査や国際協力の経験を持つ方が多く、さらに計量経済学、行動経済学、統計学、応用数学など、数理的アプローチに強みを持つ研究者の割合が高い特徴を有しています。この国際的、学際的な知見こそが、当学会の大きな特色となっております。会員の皆様には、引き続きこれらのような研究を続けて頂き、当学会の発展にご尽

力頂ければ幸甚です。例えば、マングローブ保全と観光を融合した仕組みや、水上レストランのような創意工夫は、学際的な視点での研究・応用の可能性を広げると思います。

次世代への期待

近年の大きな問題として、若手研究者が著しく減少していることが挙げられます。当学会も同様の問題を抱えています。大学等の研究者総数は、40歳代以上（主に正規職員）がそれほど減少していないので、目立った研究者減少を引き起こしてはいないのですが（学校教員統計）、少子化も加味した将来を展望するとかなり厳しい状況になると予想されます。水産業だけでなく、水産系学会も後継者不足問題に直面することとなります。若手の皆様には是非当学会に入会して頂き、国際的、学際的な視野を広げながら研鑽を積んでいただきたいと願っています。皆様の挑戦が、学会の未来を切り拓く力となります。

最後に、会員の皆様とともに、国際性、学際性を基盤とした水産業の持続可能な発展に貢献できるよう、全力を尽くしてまいります。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2. 2025年度 JIFRS 大会（東京大会）参加報告

湯浅俊介（立教大学）

2025年8月30日および31日、東京海洋大学品川キャンパスにおいて、2025年度 JIFRS 大会が開催された。筆者は本年度より国際漁業学会より加入し、本学会の大会にも初めての参加となった。普段は経済史を専門としていることから、漁業を専門とする学会への参加は新鮮な心持ちだったが、1日目のシンポジウムおよび2日目の個別報告のどちらも、研究者や漁業関係者など多様な立場の参加者によって、示唆に富む議論が展開された意義深い大会であったと感じた。

大会1日目のシンポジウムにおいては、「わが国漁業経営の現状と経営調査・研究の必要性」と題し、解題および4報告が行われた。漁業経営の所得水準が低いという状況が続く中、漁業経営の調査・分析、経営支援施策の最先端の取り組みの報告を通し、漁業経営研究、そして経営支援策の在り方について議論が行われた。

第1報告では、水産資源の変動という現実直面している漁業の経営持続可能性について、愛知県豊浜漁協の小型底引き網を事例に報告が行われた。報告によれば、周期的な変動は見られるものの、平均漁業所得は同規模の平均とほぼ同水準、漁家経済余剰についてはプラスの水準だという。しかし後継者不足による廃業が相次いでいる点について、多世帯分の所得が求められるために不十分である可能性が指摘されていたのは興味深い点であろう。上述のような指摘点を含め、適切な指標や水準の開発の必要性を強く感じた。

第2報告では、宮崎県を事例に、ビッグデータを活用した漁業経営実態調査に関する報告が行われた。本報告は、漁業におけるビッグデータ活用の好事例と言えよう。報告された漁業構造の把握や収益性を分析や試算を続けることで、より望ましい漁業経営の在り方を探ることが可能となるだろうと感じた。

第3報告では、水産事業者の経営改善および所得向上が喫緊の社会的課題であるという認識の下、活動基準原価計算の漁業への応用と収益性およびコストの可視化に関する報告が行われた。報告では、既存研究で作業時間や活動量が詳細に明らかにされていることに着目し、活動基準原価計算によって漁業活動単位での正確な原価および収益性の把握に関する試論が展開された。原

価や収益性を正確に把握することで、より収益性の高い漁業基盤形成の一助になりうると感じた。

第4報告では、長崎県を事例とした、中小企業診断士との連携の下に行われている経営支援策の事例の紹介が行われた。県や信漁連のみならず、中小企業診断士が入り、漁業者と面談などを繰り返し事業計画の策定を行った結果、多くの経営体で所得向上が報告されたという。中小企業診断士を加えることで経営計画形骸化のリスクを抑制しつつ、補助の有効活用と所得向上をもたらした事実は画期的であり、これからの日本漁業における経営指導の、一つの新しいスキームとなり得るものだと感じた。

以上の報告を基に、時間内で紹介しきれないほどに様々な質問や意見が寄せられ、活発な議論が交わされた、実り多いシンポジウムであったと言える。

2日目の個別報告では、2会場において計21報告が行われた。資源管理制度から水産物のブランド化、海業まで、実に多様な報告が行われた。筆者自身の報告もあったことや2会場での開催ということもあり、全ての報告を聴くことは叶わなかったが、以下では興味深かった報告について紹介したい。

第1会場における神山報告では、未利用・低利用魚のひとつであるカナガシラで作られた水煮缶を事例に、消費者への情報提供が消費者評価に及ぼす影響について報告が行われた。情報提供がない場合、水煮缶の代表格であるサバやイワシ、サケに比べ半分以下という低い支払意思額しか示されないカナガシラ缶であったが、情報提供を行うと、支払意思額が上昇するという傾向が見られた。資源の有限性、そして資源の持続可能な利用が叫ばれる現代において、未利用魚や低利用魚の活用は喫緊の課題でもあると言える。本報告は、そうした現代において、従来資源価値が低くなりがちな未利用魚・低利用魚の活用促進への道を開き得る、重要な報告であったと言える。

第2会場の最終報告であった及川報告では、岩手県の定置網金額および漁協の事業利益が減少していることから、技術的効率性や生産性の変化についての報告が行われた。前日に行われたシンポジウムにおいて、漁業経営体の所得水準の低さは指摘されていたところであり、そういった観点からも、本報告による効率性・生産性の把握は重要な論点であると感じた。報告によれば、技術効率性については漁協間の差が大きいものの、生産性変化の推計と併せることで、ベンチマークとなり得る漁協の抽出が可能となったとされていた。本報告の分析結果の一部を用い、岩手県では県庁および県漁業団体とも連携した漁協への個別経営指導が始まる予定であるという。本報告の分析結果は、そうした活動を通じ、よりよい経営体制構築の一助となりうるものであると感じた。

以上が2025年度JIFRS大会の参加報告である。シンポジウム・個別報告共に、日本の漁業を中心に、論点に富む有意義なものであり、そうした大会に一報告者として参加できたことを大変光栄に感じた。

最後に大会を運営して下さった事務局および関係者の皆様、そして有意義な報告を聴かせて頂いた報告者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

3. 2026年度JIFRS大会（三重大会）予告

松井隆宏大会運営委員長

2026年度大会は三重県にて行う予定です。多くの会員、関係者の皆様からのご参加をお待ちしております。調整中が多くて申し訳ありませんが、適宜、学会ホームページやメールでお知らせいたします。

会場：三重大学（共催を含め調整中）

日時：2026年（令和8年）8月中の2日間（調整中）

日程：1日目 午前：各種委員会・理事会

午後：シンポジウム（テーマは調整中）

夜：懇親会

2日目 午前：個別報告（申し込み数が多ければ午後も）

午後：総会等

参加費：一般会員 2,000 円

一般非会員 3,000 円

ただし、漁業関係者や学生は無料

4. 事務局便り

1. 2025年度 国際賞、国内賞について

2025年度は該当がありませんでした。次年度以降も推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

2. 今後の大会シンポジウムテーマ等について

今後の大会シンポジウムテーマや個別報告の特別セッションなどにつきまして、企画提案を募っておりますので、ご提案や企画などがございましたら、事務局までご一報いただけますと幸いです。

3. 会費や大会参加費の納入について

本短信の冒頭に記した情報をご確認のうえ納入をいただきますよう、よろしくお願いいたします。また、国際漁業学会は非営利団体の免税事業者のため、インボイス登録を行っておりません。年会費や大会参加費の消費税については課税対象外（不課税）となります。

4. 学会の新体制について

詳細は学会 HP にて確認下さい。今後とも、国際漁業学会における活発な活動をよろしくお願いいたします。